

【ポスター発表】

児童養護施設退所者の大学等進学に関する研究

○ 中部学院大学短期大学部 平松喜代江 (6444)

キーワード3つ：児童養護施設退所者、大学等進学、プロセス

1. 研究目的

全国高等学校卒業者の大学等の進学を希望する者は 86.7%で、実際に進学した者は 53.8%となっている。一方、児童養護施設入所者の大学等の進学を希望する者は 27.0%で、実際に進学した者は 11.4%となっている(厚生労働省,2013)。このように、児童養護施設入所者の大学等進学希望者は、全国高等学校卒業者の進学希望者に比べ3分の1に過ぎない。この進学希望率が極めて低い背景には、大学等進学を様々な原因や経過により諦めざるを得ない児童養護施設入所者が少なくないと考えられる。吉村(2011)は、調査結果から、自分自身のおかれている状況・環境によって諦めている者が半数いることを報告した。永野(2012)によれば、児童養護施設退所者の大学等への進学率の低さは、「進学希望・意欲の低さ」「進学実現率の低さ」という二重の課題があることを指摘した。そこで、児童養護施設入所者に、どのような支援があれば大学等進学が実現できるのかについて明らかにする。そのため、大学等に進学をした児童養護施設退所者を対象に、どのような支援があつて大学等に進学を実現したのか聞き取りを行う。

2. 研究の視点および方法

調査協力者 大学へ進学した20歳代の4名の児童養護施設退所者を調査協力者とした。

調査時期 調査は2016年6月～2017年3月の期間に実施した。

調査手順 4名の大学に進学した児童養護施設退所者にインタビュー調査を実施した。インタビューは、半構造化面接の形式をとり、約1時間行った。インタビューは本人の了承を得てICレコーダーに録音した。

調査内容 「児童養護施設での生活」と「大学在学中の生活」に分けて、それぞれの生活のなかでの「家族の状況」「本人の状況」「社会資源」について自由に話してもらった。

録音記録の処理 録音された4名の調査協力者の録音記録は再生して逐語録を作成した。作成された逐語録から「入所理由」「小学校期で希望していた進路」「中学校期で希望していた進路」「高等学校期の具体的な進学支援」の4つの項目に分類し総括表を作成した。

3. 倫理的配慮

本研究に関わる調査は、日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守した。調査に際しては事

前に書面にて調査の趣旨および匿名性とプライバシー保護を遵守すること、研究目的以外で調査結果を利用しないことを説明し承諾を得た。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。本研究は中部学院大学倫理審査委員会（受付番号：E16-0018）の承認を得た。

4. 研究結果

作成した逐語録から、進学率が低い理由を明らかにするために、①入所理由、②小学校期で希望していた進路、③中学校期で希望していた進路、④高等学校期の具体的な進学支援に関して整理した。

①入所理由として、「家庭の経済的な理由」を挙げた者が2名、「養育者不在のため」が2名であった。②小学校期で希望していた進路は、「小学校の先生」、「漫画家」、「施設の子どもに関わる仕事」、「まったくない」とそれぞれ1名であった。③中学校期で希望していた進路は、「高等学校に進学を希望」した者が2名、「希望なし」が2名であった。④高等学校期での具体的な進学支援(複数回答)は、「志望大学の選択に関する支援」が4名、「奨学金制度に関する支援」が2名、「大学説明会に同伴参加の支援」は1名、「入試における面接対応に関する支援」が1名であった。

5. 考察

児童養護施設入所理由として示された「家庭の経済的な理由」、「養育者不在のため」から推測して、調査協力者たちが置かれていた家庭での生活環境は、安心・安全な生活が保障されていたとは考えにくい状況であった。そして、そのような生活環境でありながらも、「小学校期で希望していた進路」として、3名の者はそれぞれ将来の夢を抱くことができていたことがわかった。子どもたちにとって安心・安全ではない生活のなかどのようにして将来の夢を抱くことができたのか興味深い。さらに、中学校期における高等学校への進学希望について、今回の調査結果では、4名中2名にあたる50%の者が高等学校への進学を希望していなかった。このことは、全国中学校卒業者の高等学校進学率の98.4%と比較して(厚生労働省, 2014)、多くの中学生が高等学校へ進学する状況下において極めて低い進学希望の結果となった。この高等学校進学の希望が低い理由について、調査協力者たちの置かれていた生活環境や小学校期で希望していた進路との関係から今後検討していきたい。高等学校期での具体的な進学支援の結果から、大学等進学の際に家庭の困窮した経済状況があった場合においても、奨学金制度を利用して大学等進学を実現したことがわかった。今回の調査協力者たちは、「家庭の困窮した経済状況」があっても大学等進学の希望を諦めることなく進学を実現することができたが、今後は大学等進学を希望するすべての児童養護施設入所者が大学等進学を実現できる支援の在り方を検討したい。